慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	倉沢愛子略歴・主要研究業績
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2012
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.73 (2012.) ,p.97- 101
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2011年度定年退職者略歴・著作目録一覧
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000073-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2011年度定年退職者略歴・著作目録一覧

倉沢愛子　略歴・主要研究業績

I.　略歴

1946年　生まれ
1970年　東京大学教養学部教養学科国際関係論コース卒業
1972年　東京大学社会学研究科修士課程修了、同博士課程へ進学
1976–78年　コーネル大学博士課程在学（1988年にPh.D取得）
1979年　東京大学社会学研究科博士課程単位取得満期退学（2012年に論文博士取得）
1982年–91年　摂南大学国際言語文化学部助教授（1988年から教授）
1991年–93年　在ジャカルタ日本大使館専門調査員
1993年–97年　名古屋大学大学院国際開発研究科教授
1997年–2012年　慶應義塾大学経済学部教授

II.　研究の変遷

東京大学在学中からインドネシアにおける日本軍政期（1942–45年）の社会史に関心をもち、その後大学院において引き続き研究した。当時の日本では、東南アジア研究の環境が整っていなかったので、博士課程途中からフルブライト奨学金を得てアメリカのコーネル大学へ留学、ベネディクト・アンダーソン教授らの指導のもとで博士号を取得した。論文のタイトルは、“Mobilization and Control: A Study of Social Change in Rural Java under Japanese Occupation 1942–45”で、これはのちに日本語（『日本占領下のジャワ農村の変容』草思社1992年）とインドネシア語で出版した。

慶應義塾大学に赴任してから従事した研究テーマは、それ以前と比べて大きく拡大して幅広いものになったが、それは大きく四つにわけることができる。

一つは、それ以前からのテーマ（戦時期東南アジアの社会・経済史）の継続である。この研究関連では2005年から2007年にかけて、岩波講座「アジア・太平洋戦争」全8巻の編集・刊行に携わったことは、私にとって大きな体験となった。戦時期の社会経済史の最後のまとめとして、インドネシアのみならず東南アジア全域を対象とした研究を、現在執筆中で、これは岩波書店から『資源の戦争』（「戦争の経験を問う」全13巻の一つとして）と題して2012年中に出版予定である。

二つ目のテーマは、関心を現代インドネシアの農村社会へと拡大し、開発体制のもとでの社会変容を分析してきた。この研究は前任校、名古屋大学大学院国際開発研究科で教鞭をとることになった頃（1993年–）から、講義科目との互換性のために少し始めたものであるが、慶應義塾大学へ就職した頃（1997年）からさらに力を注いだ。そして農村との比較の視点で、都市（ジャカルタ）の集住地区も調査対象に加え、住民の生活実態の観察・分析を行った。

この開発体制下における農村並びに都市集住地区の社会変容をテーマは主としてフィールド調査（観

察とインタビュー）を基本とする手法で行ってきた。一つの調査地域（隣組などの小さな単位）をさだめ、調査期間中はその地域内に住み込み、まず住民の悉皆調査を行った後、特定のテーマに関して観察と聞き取りをおこなうという手法をとった。アンケート調査のように数を追うのではなく質的な調査を重視した。

慶應義塾大学在職中に新たに始めたもうひとつの研究テーマは、経済学部の松村高男教授、矢野久教授、清水通教授らと共同で取り組んだ大量虐殺に関する研究で、このテーマに関しすでに三点の論文を発表したが、さらに近日中に岩波から単行本（選書）として刊行予定である。

慶應義塾大学在職中は、以上の3つのテーマの他に、もうひとつ戦後の日本とインドネシアの関係史をライフワークとして追い続けた。これはいわば、戦時期の日本軍の占領の歴史の続編ともいうべき研究で、「大東亜」戦争終結以後の日本とインドネシアの関係を、広い意味での終戦処理という観点から、「戦争」の問題を常に念頭に置きつつとりあげたものである。このテーマに関しても、何篇かの研究論文を刊行したが、それらを集大成して、2011年10月に『戦後日本＝インドネシア関係史』（草思社）として出版した。また本書により、2011年に東京大学から博士号を授与された。本書の最初の5つの章は、終戦からスハルト時代の初期（1970年代初頭）までの両国関係の歴史（終戦処理、引揚げ、賠償、経済協力など）を編年的に叙述したのち、現代インドネシアに残る日本軍政の残影として、隣保制度などの統治のメカニズムを考察し、また現代インドネシアの対日観を論じた。

III.　教育活動

慶應義塾大学における教育活動で力を入れたのは、自分がやってきたような海外フィールド調査を学生に体験させることであった。そのために、研究会の学生を引率して毎年ひと夏をインドネシアの農村と都市集住地区で過ごした。これは名古屋大学時代、大学院の主要なカリキュラムのひとつとして行っていたものを引き継いだものであるが、年々大規模になってきた。3年生でまず農家でのホームステイなど現地の生活体験をしたのち、4年生では卒論のためのフィールド調査を行った。共同論文という形をとり、住民の生活に根付いたトピック（ゴミ処理問題、水の供給、宗教実践、行商人の生活、学校教育におけるドロップアウト問題など）をとりあげてチームで合同調査を行い、最後に共同で論文を書くという形をとった。調査は、質問票を使用した面接による聞き取り（インタビュー）方式で、片言ながらできる限りインドネシア語で行うこととし、そのために、三田で開講されているインドネシア語を全員履修することを義務付けた。観光では見るここができない住民の日々の生活を観察し学ぶことによって、多くの学生は異文化に対する柔軟な思考を身に着け、「開発途上国」と分類される国は、けっして「遅れている」わけではないという認識を新たにした。このような形でインドネシア研修旅行や調査に参加した学生はゼミ生を中心に、合計100人を超えた。

その後は、独立後のインドネシア史や、急激な経済開発の結果生じたさまざまな社会問題の分析を行ってきた。歴史研究はできうる限り一資料に依拠し、これに加えて聞き取り調査も行った。現代社会の研究は、フィールドにおいて長期にわたって定点観測を行い、観察と聞き取りを織り交ぜた手法をとっている。

この間三つの大学で教鞭をとり、アジア社会史、社会問題、開発と社会変容などの科目を担当した。また博士論文執筆のために一年間コーネル大学に復学したほか、半年間インドネシアのガジャマダ大学で教鞭をとり、さらに慶應義塾大学との交換プログラムでケンブリッジ大学のダウニング・カレジに

フェローとして滞在した。

IV. 主要著作一覧

①著書

Lahirnya Tentara Pembela Tanah Air［ジャワ防衛義勇軍の誕生］(Jakarta: LEKNAS-LIPI, 1977)

『日本占領下のジャワ農村の変容』（サントリー学芸賞受賞）草思社 1992

Mobilisasi dan Kontrol: Probahan Sosial pada Masyarakat Jawa 1942–45, Jakarta: Gramedia, 1993

『二十年目のインドネシア』草思社 1994

『写真記録東南アジア—歴史・戦争・日本・・第三巻　インドネシア』ほるぷ出版 1997

『東南アジア史のなかの日本占領』（編著）早稲田大学出版部 1997

『南方特別留学生が見た戦時下の日本人』草思社 1997

『女が学者になる時』草思社 1998年9月

『ジャカルタ路地裏フィールドノート』中央公論新社 2001

『「大東亜」戦争を知っていますか』講談社 2002

『岩波講座アジア・太平洋戦争　第七巻　支配と暴力』岩波書店 2006（編著）

『インドネシア：イスラームの覚醒』洋泉社 2006

『都市下層の生活構造と移動ネットワーク』明石書店　2007年（編著）

『変わるバリ・変わらないバリ』（吉原直樹と共同編集）勉誠出版 2009

『インドネシアと日本—桐島正也回想録』論創社 2011

『戦後日本＝インドネシア関係史』草思社 2011

② 論文

「ジャワ防衛義勇軍の設立」『東南アジア——歴史と文化』 4号1974

「アンカタン・ムダ運動の形成と展開」『アジア研究』22巻1号1975

「ブリタル反日蜂起の史的考察：インドネシア八月革命序曲」『東南アジア研究』13巻4号 1976

「日本軍政期のインドネシア反日運動の一考察：レンガスデンクロック事件におけるサプ・マスの役割」『アジア経済』17巻4 号1976

「日本軍政期におけるスマトラの義勇軍」『アジア経済』18巻3号 1977

「日本軍政下のジャワにおける米穀流通機構の一考察」『アジア経済』21巻11号1980

「動員と統制：日本軍政下のジャワにおけるイスラム宣撫工作について」『東南アジア—歴史と文化』10号1981

「ジャワの村落における社会変容の一考察：日本軍政下の籾供出政策とその影響」『東南アジア研究』19巻1号1981

「ジャワの甘蔗栽培地にみる社会変容の一考察：1930–45 年のジョクジャカルタを中心として」『アジア経済』23巻8号 1982

“Forced Delivery of Paddy and Peasant Uprisings in Indramayu, Indonesia: Japanese Occupation and Social Change” *The Developing Economies* Vol. 21 No. 1 1983

「日本軍政下におけるインドネシア地方行政官の変容と展開」『国際関係のフロンティア 3：東南アジア

の政治と文化』東京大学出版会 1984
"Japanese Occupation and Leadership Changes in Javanese Villages" *Utrechtse Historische Cahiers* Vol. 7 No. 2–3. 986
"Propaganda Media on Java under the Japanese 1942–1945" *Indonesia*, No. 44 (Nov. 1987) Cornell University
「日本軍政下におけるジャワの大衆動員政策」『歴史学研究』増刊号 586号 1988
「日本軍政下のジャワにおける映画工作」『東南アジア——歴史と文化』No. 18 1989
「日本軍政下のジャワにおける教育政策」荒井信一・藤原彰編 『現代史における戦争責任』 青木書店 1990
"Marilah Kita Bersatu!——Japanese Propaganda in Java 1942–45" in K. M. de Silva, Sirima Kribamune, & C. R. de Silva edit., *Asian Panorama: Essays in Asian History,Past and Present*, New Delhi: Vikas Publishing House PVT LTD, 1990
「独立運動と国家形成: 蘭領東インド」矢野暢編『講座東南アジア学9 東南アジアの国際関係』弘文堂 1991
"Films as Propaganda Media on Java under the Japanese, 1942–45" Grant K. Goodman edit., *Japanese Cultural Policies in Southeast Asia during World War 2*, New York: St. Martin's Press 1991
「キンタルの時代: 日本軍政下のジャワの一村落の盛衰」」池端雪浦他編『東南アジア国家の歴史的位相』東京大学出版会 1992
「東南アジアの民衆動員」『岩波講座近代日本と植民地 第二巻帝国統治の構造』岩波書店 1992
「インドネシア脱植民地化の過程にみる日本とオランダ」『歴史学研究』672号1995
「戦前・戦中のインドネシア人日本留学生の軌跡」『20世紀アジアの国際関係IIIナショナリズムと国家建設』原書房 1995
「開発体制下のインドネシアにおける新中間層の台頭と国民統合」『東南アジア研究』34巻1号1996
"Rice Shortage and Transportation", in Peter Post & Elly Trouwen Bouwsma edit. *Japan Indonesia and the War*, Leiden: KITLV Press 1997.
「インドネシアの村落開発における情報伝達——「クロンプンチャピル」を中心に——」『アジア経済』第39巻9号1998
「テレビ広告による民主主義へのいざない——1999年総選挙における選挙教育と情報提供」『ワールドトレンド』2000年4月号
「民主化の模索——総選挙から新政権誕生へ——」後藤乾一編『インドネシア——揺れる群島国家』早稲田大学出版会 2000
「9・30事件とインドネシア共産党撲滅」松村高夫・矢野久編『大量虐殺の社会史: 戦慄の20世紀』ミネルヴァ書房 2007
「グローバリゼーションの中の日本文化」水島裕雅編『講座・日本語教育学 第一巻 文化の理解と現との教育』スリーエー・ネットワーク 2005
「二〇世紀アジアの戦争: 帝国と脱植民地化」倉沢愛子他編『岩波講座アジア・太平洋戦争 第一巻 なぜ、いまアジア・太平洋戦争か』岩波書店 2005
「インドネシアにおける対日歴史認識」『国際問題』No. 549 2005年12月号

「ポスト開発と国民統合・民主化」『社会学のアクチュアリティ9巻　グローバル化とアジア社会』東信堂 2006

「岸信介とインドネシア賠償」『現代思想』35巻1号 2007年1月

「「大東亜」戦争期の対イスラーム政策」坂本勉編『日中戦争とイスラーム――満蒙・アジア地域における統治・懐柔政策』慶應義塾大学出版会 2008

「東南アジア占領における「ロームシャ」の意味――泰緬鉄道建設ロームシャたちの記録」『南京事件70周年国際シンポジウムの記録』日本評論社 2009

「インドネシアの経済発展と日本企業――マジャラヤの地場繊維産業衰退問題をめぐる新解釈」『三田学会雑誌』102巻２号（2009年７月）

“Swaying between State and Community: Role and Function of RT/RW in Post-Suharto Indonesia” Benjamin Read & Robert Pekkanen ed. *Local Organizations and Urban Governance in East and Southeast Asia: Straddling State and Society*, London and New York: Routledge 2009

「台頭するインドネシアの新中間層とイスラーム」『グローバル化と変容するアジア』アジア大学アジア研究所 2011

「インドネシア9・30事件と社会暴力」『岩波講座　東アジア現代史通史　8巻』2011